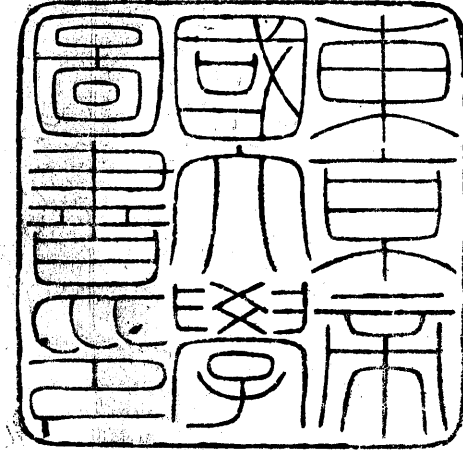


理學士山崎直方  
理學士佐藤博藏 共編

大日本地誌 卷六

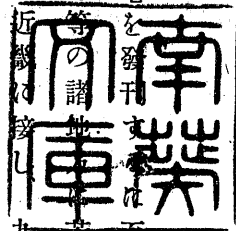
東京博文館藏版



B 39472

緒言

吾が大日本地誌編纂の事業は次第に其歩武を進めて、今爰に第六卷を發刊す。是は至  
れり。本卷收むるところの中國地方は、其面積の點に於ては奥羽中部等の諸地と異  
かず、人文發展の上に於ては近畿地方に及ばざれども、山陽の地は、近畿に接し九



州に近く、四國に對し、交通往來の便、物質集散の利、頗る重要な位置を占め、殊に  
瀬戸内海は陷落地帯として地形上の興味甚だ尠しとせず、長江曲灣、幾多の良港都市  
を此沿岸に産みて、本地方に於ける人文發達の中心と成せり。山陰は山陽に比して本  
邦文化の中心に遠かりたれど、太古は出雲民族の根據地として歴史に著はれたるの地  
自づから一種特有の風俗を有し、記すべく叙すべきのこと決して少しと謂ふべからず  
唯編者の淺學菲才なる、其の真相を記し得て完からざるを憾みとするのみ。是等は  
大方の高教を待ちて、更に訂正するところあるべし。

本卷の編纂に關係せるものは、大體に於て前數卷と異るところなし。即ち吾人兩名  
の外、地文に關しては、理學士大日方順三氏を勞せしこと最も多く、人文に關しては

井野邊茂雄、石渡延世、田山録彌の諸氏に負ふること頗る多く、武田櫻桃四郎、前田勳、遠藤重男、伊藤良藏の諸氏亦諸種の點に於て、本書の編纂に盡力せられ、其他、地圖の製作に於ては太田健吉郎氏、地質の部は理學士矢部長克氏、農業の部は農學士佐々木祐太郎氏、水産の部は北原多作氏の教を辱うせしこと少なからず。今、本卷を世に公にするに當りて、以上の諸氏に向つて謝意を表す。

明治四十年八月

編者識

# 大日本地誌卷六(中國)目次

## 總論

### 第壹編 地文

#### 第一章 地形

概論

美作國

總説 ○ 中國山脈 ○ 高田川以西の山岳 ○ 高田川津山川間 ○ 津山川以東 ○ 江見川倉敷の東方 ○ 平野 ○ 水系 ○ 湖沼

備前國

總説 ○ 山嶽 ○ 東大川以東の山地 ○ 東大川西大川間の山地 ○ 西大川以西 ○ 兒島半島 ○ 平野 ○ 水系 ○ 海岸

備中國

一頁

八

八

八

二〇

三一

四一

## 海岸

り。周圍凡そ一籽半、其の大きい浮沼池と略、相等しく池の東隣には長澤池あり。國の西部高津川河口に近くある。蟠龍湖は亦周圍一籽に過ぎざる小潟湖なり。

本國の海岸は概するに東北より西南に向ひ、出入屈曲極めて乏しく多くは山巒海に逼りて沿岸平地少く所々に沙濱あれども港灣少なし。江川河口以北は概ね第三紀層の丘陵海に逼りて斷崖沙濱相亦互し、多少の屈曲ありと雖も港津と稱すべきは僅かは溫泉津のみ。江川以南濱田に至る間も出入少なく、巉岨沙濱相交はり、沙濱には所々に沙丘の發達せるを見る。濱田灣は本國第一の良灣にして灣口の北部には矢野島馬島瀬戸が島等の諸島散點せり。灣を出て、尙西南に進むも海岸の形勢は敢て北方と異なるなく、其だ單調を極め、岩角の突出せるものに白島鼻觀音崎魚待鼻等あり、魚待鼻以南遠田の濱に至るまでは概ね懸岨をなせども、遠田より小濱に至る間は平滑なる一帯の狭き沙濱にして、沙丘好く發達せり。小濱以西は海岸急に傾きて平沙の地なく、石見長門の國界に於て突出せる岬角を鑪崎といふ。

## 島嶼

本國の海岸には島嶼の大なるものなく、唯岬角の先端怒濤に洗はれて分離せる岩礁の島として存するあるのみ。其の稍大なるものを北方より擧ぐれば、邇摩郡宅野の西方に辛島表島あり、溫泉津の西方に櫛島那賀郡淺利の東方に大島あり、又濱田灣口の北部には瀬戸が島馬島矢野島等點在し何れも岸邊陡岨多く附近海上の風光明媚なるにより小西湖と稱せられ、本國勝地の一に居る。尙ほ西南に至れば觀音崎の西北約十籽の洋上に高島の小孤島あり。

## 隱岐國

隱岐國は出雲國の北方、日本海の南部に於ける一群島を包括する者にして、其面積總て三百四十二平方籽餘二十二平方里餘を領し、島根縣に屬す。本群島は其の排列の状態によりて自ら島前及び島後の二部に分たる。島前は中の島西の島知夫里島の三大島と數多の小島嶼とより成りて群島の西南部を占め、島後は即ち島後と稱する一大島とこれに附屬せる夥多の小嶼とより成り、東北部に位置す。

隱岐國  
總說

島前

島前を形造る三大島は鼎足の状をなして中の島は東に位し、西の島は西に、知夫里島は南に座し、其の間に一内海を抱く。此の内海は狭き海峡によりて外海を通じ、中、西の兩島間には中井口の海峡あり、西、知夫里間には赤灘瀬戸、知夫里、中二島の間には大口海峡を挟む。

中の島

中の島は即ち海士郡の地にして、地形少しく南北に延び、面積約五十二平方軒半を有し、甚だしく水平的の肢節に富みて、海岸線の長さは約七十軒に達し其輪廓恰も狗兒の前肢を舉げて嬉戯するものに似たり。其の右肢は東方に突出せる知々井崎にして、其れと頸部との間に一灣を擁して知々井の錨地を作り、左肢は西北に延びて其の先端に菱浦の錨地を抱けり。而して島の南方にある高田鼻及びビキロが崎は即ち其の後肢に該當すべきものたり。垂直的の肢節は甚だ單簡にして、全島總て丘巒起伏の地たるに過ぎざれど、西部は概して高く、東方は次第に陵夷して低き丘陵地となり、従つて島の西側面は東面よりも比較的急斜せるの傾きあり。山岳の稍、著るしきものは島の西北隅にある安答堂山(五百五十五米)及び東部にある金光山(二百三十四米)あるに過ぎ

西の島

ず。

西の島は中の島の西に位し、東北より西南に長き彎形をなし、東方即ち内海に向つて其の凹側を有せり。本島も亦水平的の肢節多く其形稍彎曲せる丁字状をなす。島の中部に於ては浦郷灣南より北に深く凹入し、従つて島は此部に於ては著しく狹窄し、地峽の幅僅かに二百米に過ぎず。且つ此地峽の地は其の左右の地が富士岩より成れる山岳なるに反し極めて低平なる砂地なるを以て島は恰も此の點に於て二分せられたるの觀あり。浦郷灣内より島の西の北海岸に出てんとする小舟は南方赤灘瀬戸を迂回するの煩を避け、人力によりて直ちに此の陸地を越ゆるを常とし、此の地峽に船越の名あり。船越の西方は略々南北に延びたる半島にして、二百米内外の連嶺これが脊梁をなし、其の頂上は高低甚しからずして稍廣き平野を作り、東方即ち内浦に向つて比較的急に傾斜せり。此の半島の中部には横山越(二百二十四米)あり、西南の方三度より東北の方赤の江に通ずる山路に當る。船越の東方に於ては島の脊梁は西南西より東北東に走れる連嶺にして、北海岸に沿うて高峰山(四百四十六

島後の海岸

を下し得べきもの多少之れあるなり。

島後の海岸は小なる屈曲出入甚だ多けれども、其中稍著るしきものは西北の福浦灣、西南の都萬灣、東南の西郷灣とし、就中西郷灣は安全の錨地にして、北海要港の一なりとす。海岸一般の形勢は多くは險崖を以て水に接し、夥多の岩礁岸に近く散在せり。而して其の岬角近傍に於て殊に多きを見るは是れ激烈なる風浪の作用により浸蝕分離せられたるものたるが故なり。津戸村の沿岸、白島崎の近傍の如きは其の最も顯著なるものとし、何れも皆風景の絶佳を以て聞ゆ。

島後の池沼

島後には池沼の大なる者なけれども、唯西郷灣の東岸津井村の地に於て金峯山の東麓、立石崎の西方にある雌池及び雄池は池畔に馬蹄石(黒曜岩)を産するを以て名あり。雌池は西方に、雄池は東方に小丘を挟んで並列し、甲は周圍五百十米、乙は七百十米に過ぎざる小池なり。此の兩池東西北の三方は丘岡を繞らし、南方は低き沙地によりて海と隔てらる。蓋しこれ往時は海と相通じて灣をなせしもの、波浪の作用にて漂積せる土砂の爲めに外海と隔絶せ

竹島

られたるものとす。其の他西海岸にある油井村の南方に油井池、檀鏡山の南麓に成澤の池と稱する小池あり。

隠岐群島の西北海上約八十五哩を距て、一孤島あり、竹島といふ。從來何れの國に屬するや不明なりしが明治三十八年二月二日以降公然日本の版圖に入り、島根縣所屬隠岐島司の所管となれり。本島は北緯三十七度十四分、東經百三十一度五十五分に位し、又他計甚麼或は舳羅島ともいふ。島は一つの狭き水道(長さ約三百一十米幅凡そ百米、深さ凡そ五尋)を距て、東西に相對峙せる二個の主島と其の附近に碁布散列せる數個の小岩礁とより成る。これ等の岩礁は概ね扁平にして上部僅かに水上に顯出するに過ぎず。主島は全く巖たる岩石にして、海風常に全面を吹き荒み、島上一の樹木なく、僅かに雜草の生ぜるを見るのみ。沿岸は全く斷崖絶壁にして殆んど攀登すべからず、所々に奇形の洞窟ありて海豹群の棲所となれり。島上飲料水更に無く、従つて人の住居に適せず。唯々毎年四五月頃より七月に至るまで海豹多く此處に群集するを以て漁者の屢々行いて此の附近に出獵するあるのみ。島の附近は海

深しと雖も其の位置函館に向つて日本海を航行する船舶の航路に當るを以て極めて危険なりといふ。本島は西曆千八百四十九年フランス船リアンクール號 (Liancourt) の發見に係り、其の稱呼を船名にとりてリアンコート岩と稱し、其の後千八百五十五年イギリス軍艦ホルネット號 (Hornet) はこれをホルネット列島と名づけたるとあり。

## 第二章 海洋並に海岸線

本地方の海岸の状態は、前章地形の下に論じたるが如く、南北兩面に於て著るしく異なるを見る。即北半面日本海に面せる海岸に於ては、極めて單調にして、唯島根半島ありて其の中に宍道湖中の海を擁するを見るの外、著るしき肢節なきに反し、南半面即瀬戸内海岸に於ては、岬灣の出入極めて多く、無數の島嶼海面に基布して、肢節の多きと九州の北部と共に、本邦稀に見る處なるのみならず、煙波穩なる内海に向へるを以て、地形の複雑なるは自然に人文の發展を促して、人文上の肢節にも又甚だ富めるを見る。然して

(竹島=独島論争) www.kri.jp.net  
概説

日本海方面にありては、海面廣濶にして深度亦大に、十尋の等深線は直に汀線に通り、少しく沖に出づれば急に其深さを増加すれども、瀬戸内海にありては岬角半島島嶼によりて、海面は灘と稱する數箇の海區に分たれ、ペンク教授の所謂「灘式」の特色を現はし、其深度も極めて小にして、大部分は二十尋を超ゆるとなく、唯稍深き所は、潮流の急なる海峡の部分に横はるを見るのみ。又此瀬戸内の海面は、昔より重要な交通線路をなし、沿海の民は海事に堪能にして海運よく開け水産も亦頗る發達せり。加ふるに其海面には大小幾多の島嶼基布羅列し、海岸には長汀曲浦斷崖絶壁と相連なり、白沙青松之を點綴して、風光の明媚なると本邦海岸中多く見ざるの地方なるを以て、海外航路の船舶も特に途を此海に取りて其風光を樂まんとするもの少なからず。

### 一 瀬戸内海岸

瀬戸内海岸は前卷近畿の部に於て、其東方の一部播磨の海岸を述べ、筆を赤穂灣に擱きたりき。されば本篇に於て述べんとする部分は、赤穂灣以西の

明治四十年九月十五日印刷  
明治四十年九月十八日發行

定價金貳圓五拾錢

大日本地誌

著作權所有

第六卷 奥付

編者 山崎

編者 佐藤



發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 飯田三千太郎

發兌元

東京日本橋區本町博文館